



256号
2020/9

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



将来は舞踏家・体操選手か：黄河源流を求めて、車で移動中の初日。まわりの景色はチベット高原的になってきた。ある街で昼食のため身近な食堂に入った。そこに店の子供がいて、学校で習ったらしい柔軟姿勢を披露してくれた。得意げなVサインは、大物のきざしか？

(2018年7月、四川省炉霍県にて 佐々木健之 撮影)

'わんりい' 2020年9月号の目次は20ページにあります

今月も、日本では見ない四字成語で、意味は「出来ない相談をする」ということです。

・>・>・>・>・>・

昔、一人の商人がキツネ皮のコートが欲しいと思ひ、キツネのところへ行って相談しました。

商人が言いました：「私はキツネ皮のコートを一着欲しいと思っているんだが、あんたが着ている皮を私に出来ないか？」

キツネはこれを聞くと、ぞっとして全身から冷や汗が噴き出しました。キツネは思いました：「これはこの商人が私を殺そうと思っているに違いない」

キツネはとても賢かったので、何食わぬ顔で言いました：「いいですよ。でも今日は急いでいたので、いい毛皮はみんな家に置いて来てしまいました。そのいい毛皮を、明日またここへ持って来ますよ。」と言いました。

言い終わると、キツネは風のように素早く走って行ってしまいました。

キツネは逃げ帰ると、この話を周りの皆にしたので、一晩のうちに近くのキツネはみんな逃げていなくなりました。それでも商人は、キツネの話の信じて、翌日も同じところで待っていました。

現在、この話は「虎と毛皮の相談をする一出来ない相談をする」として伝わっています。

・>・>・>・>・>・

言葉の意味：謀＝相談する；虎に虎の毛皮が欲しいと相談する。双方の利害が衝突する相談。不可能なこと。

使用例：悪人に、警察へ行って罪を告白するよう

勧めるのは、「虎に毛皮をくれ」というのと同じで、不可能なことだ。

～・>・>・>・>・>・

このお話は、春秋時代、魯の定公が、王室と血縁があり、王室をしのぐ権勢を持った、三桓と呼ばれる三人の貴族を牽制するために、孔子を今で云う法務長官のような役職に採用したいと思いましたが、手続き上、三桓に相談しようとなりました。当時の偉い学者の左丘明は、定公を諫めて言いました：

「孔子は聖人として名が知られています。そんな人に行為を取り締まられるのは、誰も、特に三桓の人々は嫌うに違いありません。昔、東周に一人の男がいて祭壇にヒツジの肉が欲しいと思ひ、野原のヒツジのところへ出かけて、肉を分けて欲しいと云うと、羊

は残らず逃げてしまいました。キツネの毛皮のコートが欲しくなると、キツネの処へ行って、毛皮を分けて欲しいと相談すると、キツネは一斉に逃げてしまいました。この男は、ヒツジの肉も、キツネの毛皮も手に入れることはできませんでした。孔子の採用を三桓に相談するのはこれと同じことで、彼らの答えは決まっています。」

つまり手段を誤ると、目的を達成することはできない、日本語で云うと、「木に縁りて魚を求める」ということです。

しかもこのお話、左丘明はキツネと言っているのですが、いつのころからか、相談の相手が虎に代わり、後世では、毛皮の相談をした男は、怒った虎に食われてしまう話にエスカレートしています。この本では、成語としては「虎」を使っていますが、お話ではキツネが登場しています。



挿絵満柏氏

南宋の詩人辛棄疾の詞を二首

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

〔鵲橋仙〕

己酉山行に所見を書す

辛棄疾

松の木立に暑さを凌ぎ
かやぶき屋根に雨宿り
徒然に行きつ戻りつ
岩間に酔うて滝眺むれば
こは何時ぞやの酔いざめの場

彼方の家は嫁を入れ
此方の家は嫁に出す
門口に灯火掲げてさんざめく
四方に醸すは稲穂の香り
夜ごと夜ごとの風と露

〔鵲橋仙〕

què qiáo xiān
jǐ yǒu shān xíng shū suǒ jiàn
xīn qì jí
己 酉 山 行 书 所 见
辛 弃 疾

sōng gāng bì shǔ
máo yán bì yǔ
xián qù xián lái jǐ dù
zuì fú guài shí kàn fēi quán
què yòu shì qián huí xǐng chù
松 冈 避 暑
茅 檐 避 雨
闲 去 闲 来 几 度
醉 扶 怪 石 看 飞 泉
却 又 是 前 回 醒 处

dōng jiā qǔ fù
xī jiā guī nǚ
dēng huǒ mén qián xiào yǔ
niàng chéng qiān qīng dào huā xiāng
yè yè fèi yī tiān fēng lù
东 家 娶 妇
西 家 归 女
灯 火 门 前 笑 语
酿 成 千 倾 稻 花 香
夜 夜 费 一 天 风 露

〔青玉案〕

元宵節 辛棄疾

春の夜空に花咲き乱れ
また散り落つる
降る星のごと
御車の気高き香り大路に溢れ
笛の音繁く
月は移ろい
魚龍の舞に更け行く今宵
珠の釵煌めきて
さんざめく乙女の微香過ぎゆけり
君を求めて千百度
ふと見返れば
佇み居れり
今や消えなん灯籠の下

〔青玉案〕

qīng yù àn
yuán xī
yè
元 夕
辛 弃 疾

dōng fāng yè fàng huā qiān shù
gèng chuī luò
xīng rú yǔ
bǎo mǎ diāo chē xiāng mǎn lù
fēng xiāo shēng dòng
yù hú guāng zhuǎn
yī yè yú lóng wǔ
东 方 夜 放 花 千 树
更 吹 落
星 如 雨
宝 马 雕 车 香 满 路
风 箫 声 动
玉 壶 光 转
一 夜 鱼 龙 舞

é ér xuě liǔ huáng jīn lǚ
xiào yǔ yíng yíng àn xiāng qù
zhòng lǐ xún tā qiān bǎi dù
mò rán huí shǒu
nà rén què zài
dēng huǒ lán shān chù
蛾 儿 雪 柳 黄 金 缕
笑 语 盈 盈 暗 香 去
众 里 寻 他 千 百 度
募 然 回 首
那 人 却 在
灯 火 阑 珊 处

今月は6月21日の『漢詩の会』で学習した詞二編です。詞の意味・背景などは次ページ、花岡さんの『漢詩の会』だよりをご参照ください。

南宋の詩人辛棄疾の詞を二首

報告: 花岡風子

三か月にわたったコロナウイルス自粛期間がようやく明け、六月の漢詩の会では、南宋の詩人辛棄疾の詞を二首鑑賞しました。

辛棄疾は、1140年、女真族の金の占領下にあった歴城（今の山東省）に生まれ育ちました。21歳の時、農民二千を率いて武装蜂起に参加し、そのまま長江を渡って南宋に仕えました。

南渡後、江西の提点刑獄（地方法務長官）として反乱を鎮定し、さらに湖北、湖南各地の安撫使（軍政長官）を歴任、精強な軍隊「湖南飛虎軍」を創設するなどして勇名を馳せました。一方、北方の支配者に対しては、一貫して強硬策を主張し続けた人物でもありました。その関係もあって、朱子学で有名な朱熹を始め、以前ご紹介した陸游、范成大、楊万里など、抗金派の学者、詩人たちとも親交を結びました。「この人はね、農民派と言いますか、女真族の支配下では農民を組織してゲリラ活動をしたりして、どこことなく毛沢東を思わせるところがありますね」、と植田先生。

辛棄疾は、女真族に奪われた領土を取り返すよう主張した上奏文を幾度となく書いては、政府中央に進言する一方で、宋王朝支配下の反乱に対しては容赦なく強い態度で臨みました。その一方では農民たちを大切に、彼らと親しく接した人でもあったようです。

宋王朝は北宋時代から北方異民族の侵攻を受けて軍事的には弱体化し、ついには領土の北半分を女真族に奪われてしましますが、しかし皮肉なことに、経済的にはかつてない繁栄を実現しました。この状態は南渡後も引き継がれ、南宋の都臨安（今の杭州）は肥沃な国土と海上交通の便に恵まれ、北宋時代の首都汴梁（今の開封）に負けない繁栄を誇ることになります。

南宋は軍事面では金に対する屈辱外交を強いられながらも、経済的には非常に発展していきましたので、政府内では軍事よりも経済を重んじる講和派が次第に主流を占めるようになり、抗金派は後退を余儀なくされます。そういった時流の中で辛棄疾も中央から遠ざけられ、晩年は信州の鉛山（今の江西省上

饒市）に隠居し、詩作に励みました。

彼が最も得意としたジャンルは詞でした。この分野で600余首という宋代で最も多くの作品を残しています。自分の主張が通らず、失意の晩年であったので、慷慨憂憤の作が多く、北宋の蘇軾（東坡）と並んで蘇辛豪放派と呼ばれます。しかし、一方で抒情的な傑作も少なくありません。

まず一首目は「己酉山行に所見を書す」という作品で、これは「鵲橋仙」という曲調に当てはめた歌詞です。己酉は訓読みにすると「つちのととり」、干支の一つです。西暦では1189年に当たります。辛棄疾はちょうど50歳、隠居した失意の年でもありました。

前半と後半に分けて、意味をみていきましょう。

松岡避暑	松の木立に暑さを凌ぎ
茅檐避雨	かやぶき屋根に雨宿り
闲去闲来几度	徒然に行きつ戻りつ
醉扶怪石看飞泉	岩間に酔うて滝眺むれば
却又是前回醒处	こは何時ぞやの酔いざめの場

「松岡」とは松林のこと、「茅檐」とはかやぶき屋根の庇のことで、目の前に農村風景が現れます。

「闲去闲来几度」は辺りを何度もぶらぶらすることですが、続く「醉扶怪石看飞泉、却又是前回醒处」は、作者が酔っぱらって、ゴツゴツした岩場につかまり滝を見あげたところ、前にもここで酔いを醒ました場所だったと気が付いた、というのです。まだ明るいうちから常習的に飲んで、へべれけになっていたのですね。文武両道の熱血政治家が失意の末、この年で隠居したのですから、飲まずにおれなかっただろう、とは思いますが。「中国の詩人は大酒のみばかりですね。失意の時には必ず酒を飲みます。陶淵明という詩人がどうやら酒と詩を結び付けたといえますかね。李白も杜甫も陶淵明のマネをして？ 大酒飲みになりました。今の常識からすると陶淵明は後にどれほど糖尿病患者を作り出したか知れない、けしからんヤツと言えますかねえ」という植田先生の解説に一同からどっと笑いがもれました。

北宋が減じる時の女流詩人、李清照も二日酔いの

詩を多く残しています。詩人は多く恵まれない人生を送ったので、酒でも飲まずにヤッテられるか、というところがあったのでしょうか。さて、後半の歌詞はがらりと雰囲気が変わって農村の夕べの風景を描いています。

東家娶婦	かなた 彼方の家は嫁を入れ
西家归女	こなた 此方の家は嫁に出す
灯火门前笑语	かどぐち あかりかか 門口に灯火掲げてさんざめく
酿成千顷稻花香	よも かも 四方に醸すは稲穂の香り
夜夜费一天风露	夜ごとと夜ごとの風と露

「東家」「西家」とはあっちこっちの家ということです。「归女」とは嫁に出すことを言います。「归(帰)」には行くべき所に行って落ち着く、という意味があるそうです。女性は嫁に行っておそ一人前、という時代の話です。訓読では「とつぐ」と読みます。祝い事のある家の門では、明るいランタンが並び、人々の笑い声が聞こえてきます。稲穂の香りが広々とした田んぼに広がっている情景が描かれています。夜ごとに吹く風は稲穂の香を運び、夜ごとに降りる夜露は稲穂を潤していたでしょう。自然豊かな農村で、つましく庶民らしい暮らしを満喫する農民たちの生活を活写しています。

前半はやけ酒を食らって、あちこちをフラフラする詩人の姿が描かれたかと思えば、後半は優しいまなざしで農村の人々の暮らしを眺める作者の姿が浮かび上がります。「詞は今で言う歌謡曲の歌詞なので、どうしても解釈できるようなところがありますが、時代背景や作者の経歴を知ってから読みますと、だいたい状況が想像できますね。」と植田先生。

経歴から見ると作者は、武装蜂起をした文武両道のお堅い人物のようですが、後半部分で人としての優しさを感じさせる作品です。なお、この美しい日本語訳は植田先生の手によるものです。「谷村新司さんに歌わせるといい歌になるんじゃないでしょうか」という植田先生の一言に一同大きく頷いたのでした。

さて、今回はコロナ明け初回の講義ということで、全体での発音練習を少なくするという配慮から、特別にもう一首、辛棄疾の作品をご講義いただきました。

せいぎょくあん
[青玉案] という曲調に合わせて作詞した「元夕」

という作品です。元夕とは年が改まって最初の満月のことで、中国では一般に元宵節と言いますね。では、前半から意味を見てみましょう。

东风夜放花千树	春の夜空に花咲き乱れ
更吹落	また散り落つる
星如雨	降る星のごと
宝马雕车香满路	みぐるま おおじ あふ 御車の気高き香り大路に溢れ
风箫声动	ねしげ 笛の音繁く
玉壶光转	うつ 月は移ろい
一夜鱼龙舞	ぎょりゅう ふ 魚龍の舞に更け行く今宵

「东风」とは、春風のことです。春風はまだ花を咲かせていないのに、もう花が咲いている、という、しよつ端から謎めいた第一句です。元宵節は春節から15日目の満月の夜なので、まだ寒く、花が満開ということはありません。また、第二句、三句では、雨となって降ってくるように花が散る、と続きますので、ますます頭の中に?? が浮かびますね。「解釈が分かれる作品なんですけどね。これがね、もし花火だとしたらピタッと来るんですよ」と植田先生。問題はこの時代に花火があったのか? というのですが、『武林旧事』^注 という書物の「元夕」の項目に南宋二代目の孝宗の時代に「放煙火」(花火を打ち上げた)とあり、孝宗が馬車をくり出して、見物していたという記述があるそうです。南宋の都、杭州はマルコポーロが中国にやってきて元の皇帝フビライに仕える前の都ですが、マルコポーロはその古都を訪れ、世界一美しい都市だと『東方見聞録』に書いています。実際、南宋の時代、杭州はアジア各地から沢山の物資が入っていました。打ち上げ花火は当時南宋の都にしかない行事だったと思われます。宋代の皇帝は時々お忍びで夜の街に繰り出して遊んだりもしたようで、宋という時代は皇帝と庶民の距離が比較的近い時代でもありました。「宝马雕車」とは、飾りや彫刻を施した皇帝の馬車です。その馬車が通り過ぎる時、お香や香木の香りが道路に満ち溢れたとありますね。「玉壶」とは月のことです。月光が空をめぐる間、街では一晩中魚龍の舞が供されたようで、今の横浜中華街の春節の風景に近いものがあったかもしれません。もちろんその何十倍も盛大だったと思いますが……。

では、後半を見てみましょう。

蛾儿雪柳黄金缕	たま かんざしきら 珠の 釵 煌めきて
笑语盈盈暗香去	さんざめく乙女の微香過ぎゆけり
众里寻他千百度	君を求めて千百度
蓦然回首	ふと見返れば
那人却在	たたず お 佇み居れり
灯火阑珊处	今や消えなん灯籠の下

「蛾儿」以下は髪飾り、「雪柳」、「黄金缕」もかんざしの種類です。これで、何種類ものかんざしをさした美しい女性をイメージできます。後半二句目は「笑语盈盈」で笑い声が満ちるという意味で、大勢のおめかしした美しい女性たちの楽し気なおしゃべりの様子が目に浮かびます。「暗香去」で、彼女たちが行き過ぎた後には、お香のかおりがほんのりと漂っている様を表します。この時代、香料が発達し、上質の香木や香炉が多く出回るようになっていたそうです。三句目の「众里寻他千百度」とは人ごみの中で、何度も彼女を探した、という意味です。昔は、彼女を表す「她」という文字はなく、男女とも「他」で表していました。

さて、「千百度」ですが、中国で最大の検索エンジンを提供するネット企業《百度》の名はこの一句から来ているそうです。人ごみの中で、お目当ての女性を探す、というのと、ネット上で、お目当てのキーワードを検索することを掛けたのですね！ 大手 IT 企業の名前が古典から、というのは中国らしいですね。この作品も作者も日本人ではあまり知られていませんが、中国人の女性の友達にこの詩の話をしたところ、中国人なら誰でも知っていると言っていました。

さて、四句目以降の、「蓦然回首」は、ふと見返れば、「那人却在」は、その人は意外にもそこにいた、「灯火阑珊处」は、灯りが消えかかったところ、という意味です。何度も何度も探していた女性が、ふと振り向けば、消えかかった灯籠の下にひっそりと佇んでいた、というのですね。なんともロマンチックで印象的な最後のシーンです。

主人公の女性は一体だれを指しているのか、そもそもこの詩は恋愛詩なのか風諭詩なのか等々、中国では今でも論争が絶えず、穿った解釈が色々あるようですが、謎のままでいるところがまた詩の幻想的な雰囲気を高めているように感じます。

農村暮らしにすんなり溶け込み、農民達を大切に

した強硬派の軍人辛棄疾は、繁華な都会の雰囲気になかなか馴染めない。雑踏の中を探し続けた心惹かれる女性とは、高価な髪飾りや上等なお香で装った華やかな女たちではなく、飾り気のないごく素朴な女性だったということでしょうか。このように見てくると、この「青玉案」という作品は単に恋の歌などではなく、かりそめの平和に浮かれる都会の煌びやかな生活への彼なりの抵抗感の表れだったのかもしれない。

【後記】

さて、この「青玉案」の曲は日本にその楽譜が存在し、それがまた近年になって中国に戻り、新しい五線譜や数字譜に再現されています。なぜ古い楽譜が日本に残っていたかということ、明末の混乱期に多くの僧侶や文化人が日本に亡命して住み着いたからだそうです。その子孫の一人、魏皓ぎこうという人は、当時京都で日本人に中国の古歌を教えていたようです。なかなか人気があり、たくさんの日本人が習ったそうです。『魏氏楽譜』五十首と称する、残されたその50種の楽譜の中にこの「青玉案」も入っています。当時の記録では、明代の発音がカタカナで表記されているのもあったそうです。それが日本では失われずに現代まで残っていて、近年、本国に里帰りした、ということらしいです。但し残された楽譜は明代のもので、曲調が辛棄疾と同世代のものであったかどうかはわかりません。いずれにしろ「中国ではすでに失われた中国文化の資料が日本に残っている例は他にも沢山あります。日中間の文化交流の歴史は半端じゃなかったようですね」と植田先生。

古い中国の失われた歌が、かつて日本で歌われていて、幾時代を経て里帰りし、再び中国で蘇るとはなんと感慨深いものがあります。

後日、YouTube で「青玉案」元々が聴けるとのことので、調べてくださったクラスメイトの方がいらっしやって、聴いてみました。楽譜とはやや趣を異にした京劇風の曲調になっていましたが、私の心はふとタイムスリップしてしまいそうになりました。また、現代的なポップス調にアレンジして歌ったものもありました。興味のある方はぜひご覧になってください。

■注『武林旧事』：南宋の都臨安（杭州）の繁華な様子を記した実録書。作者周密は宋末・元初の人

中国の歴史を彩る美人百花 (2) 中国古代四大美女 寺西俊英

美人を書いていく中で、中国古代四大美女は外せない。誰でも知っている「西施」「王昭君」「楊貴妃」「貂蟬」である。書くまでもないと思うが頭を整理するため敢えて記載することにした。時代は幅があって春秋時代（BC770～BC476年）から唐代（618年～907年）と約1500年の期間なので、いずれ取り上げるが「卓文君」や「虞美人」を入れる」だけは実在の人物ではない。三大美女にすればいいものを、中国人の感性は何でも「四大〇〇」としたいらしい。例えば、蘇州の庭園では「四大名園」、仏教関係では、「四大仏教聖地」や「四大仏教名山」という具合に枚挙にいとまがない。なぜ実在していない人物を入れたのか理解に苦しむが、四大美女とするならば私としては「虞美人」を貂蟬の代わりに入れて欲しいと思っている。まず、比較しやすいように四人の基本的な項目を整理すると(表1)のようになる。

本シリーズは、美人についての連載なので「美人の形容」の項を見てみると、ご存知のように「沈魚」とは西施のあまりの美しさに魚は泳ぐのを忘れて沈んだと言われている。水中に姿を隠した、という説明の資料もある。「落雁」は、王昭君が異民族に嫁ぐ途中、悲しみのあまり琵琶

■表1 四大美女基本的な項目

氏名	生きた時代	出身地	美人の形容
西施	春秋時代 (BC770～476)	浙江省・紹興市	沈魚美人
王昭君	前漢 (BC206～AD8)	湖北省・宜昌市	落雁美人
貂蟬	後漢 (AD25～220)		閉月美人
楊貴妃	唐 (AD618～907)	蜀州	羞花美人

■表2 四大美女短所

(本名)	短所	生没年
西施(施夷光)	大足	不詳・BC5世紀
王昭君(王嬙)	なで肩	不詳・BC1世紀
貂蟬(——)	小耳	——
楊貴妃(楊玉環)	腋臭	719～756年

を奏でる彼女の姿と悲しい調べに雁が羽ばたくことを忘れ次々と落ちてきたと言う。「閉月」は、貂蟬の美しさに月もかなわぬと思ひ雲に隠れたと言う。「羞花」は楊貴妃の美しさに花も恥らうほどと言われている。四人の美しさの形容をどうすべきか、後の世の人が知恵を絞ったのであろうか。これらから美女を形容する四字熟語があり、中日辞書にもちゃんと出ている。それは「沈魚落雁」であり、「閉月羞花」である。一方で四人にはそれぞれ短所があるとネットに出ている。夢を壊す必要は無いと思うが、人間の業としてあまりに完璧な人間には足を引っ張りたいと思う願望があるのかもしれない。今の時代、短所とは思われないものもあるが、当時の基準であったと思われる短所を紹介すると(表2)の通りである。

西施の「大足」であるが、現代でも大きな足より小さな足がいいと思うが、纏足の習慣のあった時代の後付けの説では、とも言われている。王昭君の「なで肩」は、なぜこれが短所になるかわからない。いかつい肩よりよほど女性らしくていいのではなからうか。貂蟬の「小耳」も、小顔にしたいメイクなどのコマーシャルを見ると小耳の方がよほどいいと思われる。楊貴妃の「腋臭」は、玄宗皇帝からすると余計なお世話と怒られるのではと思う。息子の嫁を奪い取ったくら

いであるから、むしろ清代のウイグル族の王妃であった「香妃」のように芳しい匂いであったと筆者は想像する。

この4人に関するエピソードや資料は星の数ほどあるが、紙幅の関係で的を絞って次に彼女たちと深い関わりのあった人物について触れて(その2)をまとめた。

①西施:夫差(呉王)、勾踐(越王)、范蠡

皆さんご存知の通りであるが、流れを再確認しておきたい。呉越の戦いの中で「西施」は否応なく歴史の荒波に組み込まれていく。古今東西、隣接する国は一般的に仲が悪い。呉と越はどちらが先に手を出したのか分からないくらいであるが、一応呉王であった「闔閭」が先年攻撃を受けた仕返しに越を攻撃したところ敗れて自らも負傷し、それがもとで病死した時点から「呉越の戦い」を見てみよう。「闔閭」は、死に際に息子の「夫差」に仇討ちをするように言い残した。「夫差」は、3年以内に必ず復讐するとして薪の上で寝て屈辱を忘れないようにした(「臥薪」)。その後富国強兵に励み越に攻め込み、越王「勾踐」を破り捕虜とした。この時に「勾踐」を切り捨てるべきと進言した「伍子胥」を遠ざけたのが間違いであった。ここで「勾踐」を亡き者にしておけば歴史はどのように展開したであろうか。「勾踐」は奴隸として「夫差」の馬小屋の番人とされたが、よく屈辱に耐えぬいた。そのうち許されて国に帰った。ここで「范蠡」が登場する。「勾踐」は懐刀の「范蠡」にどうすれば呉を打ち破れるか、相談した。「范蠡」は、色仕掛けで「夫差」を骨抜きにするのがいいと進言し、国内を巡り美女を探し歩いたのである。「勾踐」は毎日苦い肝を舐めて屈辱を忘れないようにした(「嘗胆」)。有名な四字熟語(臥薪嘗胆)の誕生である。「范蠡」は今の紹興市内のとある村で、洗濯していた13~14歳の美しい娘に釘付けになった。それが「西施」である。自分の所に連れて行

き3年間徹底的に歌舞、立ち居振舞いなどを仕込み「夫差」が好む女性に仕立て上げたという。二人が出会った時、「范蠡」は50歳くらいであったようだ。「西施」を「夫差」に献上すると案の定、彼女の虜になり政治に力を入れなくなった。一方の「勾踐」は国力を富ませ、10年後遂に「夫差」を打ち破ったのである。

その時「西施」の運命はどのようになったかについては2説ある。一つは捕らえられ皮袋に入れられ長江に沈められたという。もう一つは「西施」と「范蠡」は年の差があったがお互いにひかれあっており、范蠡がどさくさ紛れに彼女を連れ出し逃げて幸せに暮らしたというものである。筆者は前者と思うが、江蘇省で生まれた〈昆劇〉では有名な演目の〈浣紗記〉では後者の説に基づいて構成されている。以前「わんりい」240号(2019年1月号)で、2018年に無錫に旅行した時のことを書いた。太湖の湖岸に「太湖鼈頭渚」という太湖一の風光明媚な観光地があるが、その近くに〈蠡湖〉という名の小さな湖があり、一角に〈蠡園〉という公園があることを書いた。ガイドによると「范蠡」が官を辞したのち西施とこの地で過ごしたという逸話から名付けられたという。やはり庶民はハッピーエンドを望むのであろう。

②王昭君:元帝、毛延寿、呼韓邪单于(匈奴)

漢(前漢)の第11代皇帝である「元帝」(在位BC49~33年)の時代、匈奴の「呼韓邪单于」が



熊本城本丸御殿「昭君之間」

(熊本市観光政策課ホームページより)

漢の女性を君主の正妻(閼氏という)に迎えたいと申し入れてきた。大漢帝国とすれば断ればよいようなものであるが、この頃の匈奴は侮れない力を持ち漢としては重要な外交相手であったため、先方の申し出を無下に断るわけに行かず「元帝」は後宮の中の宮女から選ぶこととした。数多の宮女を一人一人面接するわけに行かず宮廷画人に描かせた。宮女は皆美人に描いてもらい皇帝の寵愛を得たいがため、また野蛮な異国の地に行きたくないため、「毛延寿」という画人に賄賂を贈り美しく描いてもらったという。ところが「王昭君」は賄賂を贈らなかったところ、醜く描かれてしまったのだ。当然「元帝」は「王昭君」を先方に差し出すことにした。嫁ぐ時帝に謁見し別れの挨拶をしたが、帝はその時彼女のあまりの美しさに驚いたのである。今更匈奴との約束を撤回できずしぶしぶ送り出した。後で「毛延寿」が賄賂を貰わなかった「王昭君」を醜く描いたことがわかり、彼の首を刎ねてしまったということである。

さて「王昭君」は「呼韓邪单于」との間に一子をもうけたが、彼は若くして身罷ってしまった。匈奴の慣習ではこうした場合、彼の息子の嫁にならなければならず「王昭君」は承服しなかったと言われるが、漢王朝から命令され仕方なく息子の嫁になったという。その息子とは二人の女子をもうけた。何しろ約二千年前のことであるから、何が真実か断定することはできない。「落雁」の故事も後世の人の作り話であろうし、王昭君は匈奴の地で楽しく暮らしていたのかもしれない。王昭君の生没年は不詳であるが、墓は数か所以上あるという。なかでも〈呼^フ和^ホ浩特市〉にあるものが有名である。九州の熊本城の本丸御殿内には「昭君の間」があり、王昭君の襖絵があるそうだ。

③貂蟬:董卓、呂布

「貂蟬」は、三国志演義に登場する架空の女性なので簡記する。演義の第八回から登場するが、要は「董卓」と彼の養子の勇将「呂布」を仲違いさせる計画に彼女が利用されたとするものである。「董卓」(生年不詳~AD192年)と「呂布」(生年不詳~AD198年)は実在の人物である。二人は、〈黄巾の乱〉が全国各地で勃発し、ついにAD220年に後漢が滅亡するという世情不安の時代に生きた人物である。「貂蟬」は架空の人物であるが、董卓の侍女がモデルだとする説がある。因みに「董卓」は養子にした「呂布」によって誅殺されている。

④楊貴妃:玄宗皇帝、武惠妃、寿王

楊貴妃については、次号の「環肥燕瘦」で書いていくのでここでは簡単に触れるに留めたい。「玄宗皇帝」には「武惠妃」という寵妃がいた。その間に生まれたのが「寿王」である。735年、「楊貴妃」は16歳で「寿王」の妻となった。ところが737年に「武惠妃」は若くして亡くなったのである。この時玄宗は52歳、「武惠妃」を悼んで妃から皇后にした。そこまでは良かったが、玄宗は新たに寵愛の為の美女を求めた。気の毒なことに近くにいた息子の嫁に目が行ってしまったのだ。どうしても楊貴妃が欲しくなった玄宗は見初めたその年の740年、彼女を一度出家させ女道士とした。その後皇帝の後宮に入れ皇后と同じ待遇にした。息子から妻を奪う形になるのを避けるために。長安の東にある〈温泉宮〉で道士したのである。いつの時代の皇帝も欲しいものを手に入れるためには手段を選ばず、まことに始末に負えない存在である。可哀そうな「寿王」のその後であるが、彼は745年に韋昭訓の娘を嫁にもらっている。彼は玄宗の18番目の子であるが、達観していたのかもしれない。

(続く)

今年(2020年)は新型コロナウイルス騒ぎで明け、何時終わるともなく夏が過ぎようとしておりますが、四姑娘山等の長江上流部では例年になく雨が多く気温が低い日が続きました。穀物等の作柄が心配される中ですが、8月に入って出回り始めた四姑娘山下流が産地の青いリンゴ(アメリカのゴールデンデリシャスで当地の品種名は金冠)を見て、それでも季節は廻っていると少し安心しています。

話は四姑娘山麓に在る私の家の自然庭園の花に変わりますが、今年の花き具合は良くありませんでした。雨は夏だけでなく4月も多く、通常この時期に花を咲かせるギンラン(*Cephalanthera longifolia*)は沢山付いた蕾が花を開かずに枯れてしまいました。5月はほぼ例年並みの天候だったせいか、アツモリソウ(*Cypripedium tibeticum*)写真1とサクラソウ(*Primula involucrata*)は6月初旬に綺麗に咲きました。またアネモネ(*Anemone* sp.)やシオガマグキ(*Pedicularis* sp.)や野イチゴ(*Fragaria moupinensis*)等の雑草のような花は例年通り一杯咲きました。

しかし6月から7月に掛けて雨が多く晴れ間が少なかったためか、この時期に咲くラン科のカキラン属(*Epipactis mairei*)やサギソウ属(*Habenaria glaucifolia*)は花の数が少なく精彩を欠きました。このような状況の中で唯一ワクワクさせてくれたのは、家の自然庭園で初めて咲いた旧ユリ科で現在アスパラガス科のマイヅルソウの仲間(*Maianthemum henryi*) (写真2・3)でした。この花の葉っぱや茎は以前から自然庭園の彼方此方で見掛けていましたが中々育たず、株が消えてしまった年もありました。小さく地味な花で、しかも未だ株が小さいせいか花の数が少なくて迫力に欠けますが、今年唯一、シャクヤク(*Paeonia anomala*)の株に寄り添うように茎を伸ばしていた株に初めて咲いた花を見た時は感動しました。



写真1 : アツモリソウ(*Cypripedium tibeticum*)の仲間、中国名「西藏杓兰(xī zàng sháo lán)」



写真2 : *Maianthemum henryi* (マイヅルソウの仲間)、中国名「管花鹿药(guǎn huā lù yào)」



写真3 : 上の写真の(マイヅルソウの仲間)拡大図

海外出張の思い出-最終回 (クウエート編④)

高島敬明

全く緑が無い広漠とした砂漠の中、小さな板の日よけの下で家畜(ヤギ、ヒツジ)が飼われています。その横を通過して通勤するわけですが、家畜の食べ残した深緑の草の食事の残りがいつも残っていました。何百キロ先まで砂漠なのに、オアシスの草原でもあるのだろうかと思っていました。ある日、日本製のピックアップの荷台に積まれた、車の2倍ほどの青々として瑞々しい草を荷下ろししているところに出くわしました。家畜が群がっていましたが、どこからこれほどの草を運んでくるのかと不思議でしたが今も分かりません。想像ですが、たぶんクウエートから東のイラクとの国境近くのチグリヌウフラテス川周辺から運んでいるのではないのでしょうか。街中の直径10センチくらいのひ弱そうな木には、国から当時のお金で一本の木に年間18万円ものお金をかけて散水車で木の周りに水をやりながら枯らさないようにしているのだそうです。食堂でも水はお金を払わないと出してくれないシステムなのです。

飲料水は自動車のガソリンより高いのですからびっくりです。さらにびっくりしたことがあります。洪水があった冬の広大な砂漠一面に、小さな小さな黄色い花が咲くのです。上から見ると分かりませんが、横から姿勢を低くして地平線を見ると広大な砂漠が見渡す限り黄色の絨毯を敷き詰めたようになります。花の咲く期間は短く、すぐに花、茎、すべてが砂漠の熱波で焼き尽くされたように視界から消えてしまいます。砂漠は単純に暑い毎日が際限なく続くものと思っていました。が、季節の変わり目がちゃんとあるのです。

ペルシャ湾沿いのアハマデ地区のアルマハデは、サウジアラビアの国境に面したペルシャ湾沿

いの小さな漁村の田舎町だったようですが、石油が出ることで大きな街になってしまいました。イラクのフセインが攻め込んできたのは、我々が帰国して6年後の1990年のことですが、我々が行った当時は平和で静かな町でした。休日にサウジアラビアとの国境に車で観光に出掛けました。ちょうど海岸沿いの道路が上り坂になった頂上为国境の検問所です。少し広場になっていましたが小さな簡素な造りでした。友好国なので形ばかりの役人が少数いるだけでした。何もないところから見学もそこそこに帰途につきました。そこから昔ながらのダウ船^{注1)}が数隻停泊している港に着きました。漁港のようです。

その昔はペルシャ湾で海風を切って走っていたのでしょう。日本のような威勢のいい魚市場の声は聞こえてきませんが、大きな魚、小さな魚が無造作に暑い中並べられていて異様な匂いが鼻を突きます。我々は料理ができないのでお土産にはいきません。釣りの好きな先輩の話ではペルシャ湾で釣りをすると気持ちがいいほど魚が釣れるそうです。ある日それをキャンプに持って帰り刺身にさせていただいたそうですが、石油臭くてとても日本人の口には合わない代物だったそうです。ペルシャ湾は紺碧の海で油に汚染されているようには見えませんが、海水そのものが油の匂いがあるのでしょうか。

そんな中、半年に一度のワーキングビザの更新時期が近づいて来ました。更新には一度国外に出なければなりません。日本に帰ることは出来ませんので出国する国は決められていました。アラブ首長国連邦の一首長国の「ドバイ」です。石油で潤っていますが小さな国(首長国)で宗教の戒律も緩いところです。1時間足らずの飛行で着いてし

まいますが出国時のパスポートへのスタンプが必要なのです。

当時のドバイは漁港があるだけの田舎町ともいえる国でした。出国用の飛行機は我々専用のようで非常に小さなジェット機でした。操縦も戦闘機のように荒々しいのです。たぶん戦闘機のパイロットだったのでしょう。機首を下げて滑走路を目指し突っ込むようにすごい速度で着陸するので。思わず手に力が入りました。夜はホテルのバーでお酒を飲んで羽目を外しましたが、皆さん半年も禁酒に近い生活をしているので酔いも速く、町も満足に見ないで寝込んでしまいました。今からすれば田舎町とはいえもう少し町を見ておけばと後悔していますが、あんな片田舎の町が今では近代的な国家に変貌してしまって、不動産投資では世界で一番盛んなところになってしまいました。とにかくこれで又クウェートで半年働けるようになりました。

現地に着いて仕事を始めたのは 1983 年ですが、ちょうど近隣の国同士のイラン・イラク戦争(1980～1988 年)の真只中でした。直接的な影響はありませんでしたが、こうした国際情勢下、私たちの最後の仕事だったと思いますが、大規模な原油積み出し用の大きなバルブなどの設備を据え付けました。豊富な原油の積み出し設備なので非常に立派なものでした。

この中東地域の戦争は何度か繰り返されましたが、約 6 年後の戦争では追い詰められたイラク軍がペルシャ湾を原油まみれの汚れた海にするため「マニホールド」^{注 2)}を爆撃したことが新聞・テレビで報じられました。これはとても複雑な設備で苦勞して設置したものです。ペルシャ湾は見る間に真っ黒な海になってしまいました。我々が造った設備だとすぐに分かりました。悪夢を見ているようで悔しく残念な気持ちでいっぱいとなりました。心に大きな穴があいた気分でした。

この度の海外生活も 3 回目となり、あまり印象



ドバイクreek 1964 年 (ウィキペディアから)

に残る記憶もなく過ぎてしまいました。もちろん砂漠の真只中において単純な生活の繰り返しですから物珍しいことはそんなに起こらないのです。

砂漠の中の工場建設、土漠の真只中の宿舎の風景は、何年か後私が出向したエンジニアリング会社が過激派集団に襲われ多くの人が亡くなりましたが、その現場の風景は全く同じ風景でした。床下に隠れて、天井裏に隠れて、トイレに隠れて助かったと連日報道されましたが、自分のことのように身を切られるような気持ちで新聞を幾度も読み返し涙しました。

工事が終わり帰国する時は、往きと同じように簡単な旅行でした。ただ成田ではアジア方面から来る旅行者に対しての入国審査は厳しかったようです。我々もカバンの中すべてを開けて検査されました。

その後本社に向かい国内の長期出張のように淡々と報告と帰国業務をこなし、家族の待つ名古屋に帰りました。やはり家族が一番心から喜んでくれました。家内と娘の顔を見て心底ホッとしました。年齢的にも過酷な現場での仕事は気力・体力とも限界でした。北のサハリンⅡの液化天然ガスの建設工事の話もありましたが断りました。私の海外出張はこれで終わりとなりました。(完)

■注

- 1) ダウ船：中東のアラビア海の荷物用の帆掛け船
- 2) マニホールド(manifold)：一本の管から複数本の管が分岐する構造を持った気筒のこと

前にも記しましたが機長として乗務するには6か月毎の航空身体検査に合格しなければなりません。単身赴任で食生活の不摂生と加齢による身体劣化が進み、航空身体検査に適合できず乗務ができなくなりました。まだ乗務を続けたかったのですが残念でした。退職して函館から横浜の自宅に戻ると老犬が喜んでくれました。飛行時間は総計1万8千時間を超えていました。

★書き忘れたエピソード

■自転車にのれば飛行機の操縦なんて誰でも出来る！

プロペラの訓練機から初めてジェット機の実用機訓練を受けているときのことです。DC8型機は訓練機と大きく違い全てがノツタリと反応し、上手に操縦できません。何度も下手な着陸をしていると教官機長が“自転車に乗れば操縦なんか誰でも出来るんだぞ”と着陸直前に言われたことがありました。一生懸命に着陸しようとしているときにこの言葉を聞いたのです。なかなか上手にならない私の操縦にイライラして言われたと思います。何故かその後いつまでも頭にこの言葉が残っています。確かに同期のパイロットは皆自転車に乗れます。

■台湾の管制官

私がDC8型機に乗務し、国際線を飛び始めて間もない頃です。当時はアメリカ人の機長、航空機関士が多く在籍していました。この時のフライトでは機長はアメリカ人、航空機関士もアメリカ人で日本人は副操縦士の私だけでした。台北の空港に進入着陸時には、私が操縦して機長が台北の管制官との通信を受け持っていました。今と違い当時の台北の管制官の中には非常に訛りの強い英語で通信していた人がいて、アメリカ人の機長は管制官の指示の内容を確認するために“Say again＝もう一度言って下さい、Confirm＝確認します”と何度も言いながら通信内容を確認していました。すると通信していた台北管制官が突如“Do you understand English?＝貴方は英語が分かるのですか?”と言ってきました。これを聞いて私を含め3人はエッ?と驚きました。アメリカ人の機長と航空機関士は“English is our mother tongue!



ラストフライトを終えて妻と、副操縦士一家も一緒に



ラストフライトの客室乗務員たちに囲まれて

＝英語は我らの母語だよ!”と苦笑いしていました。私は台北の管制官英語に若干慣れていたので、アメリカ人の機長に操縦しながら“台北管制官の台湾英語とアメリカ英語の通訳?”をしました。台湾人管制官のこの強烈な自信がとても印象に残っています。

■パキスタンで歯痛

DC8型機の副操縦士でタイのバンコクからパキスタンのカラチのホテルに着いて間もなく、奥歯の親知らずが突然腫れて強く痛み出しました。痛くて口が開かず食べられるものはホテルでアイスクリームとコンソメスープに浸したパンくらいでした。カラチの衛生環境は極端に悪く、とても地元の歯医者に診て貰うことは考えられませんでした。ホテルから一歩外に出るとすぐ乞食がやってきて“バクシーシ!＝ほどこしを!”と外人に物乞いにやって来ます。日本航空のカラチ経由のローマ便は週に1便しかなく、私の代わりに別の副操縦士を呼び寄せることも難し

い状況でした。機長に自分の状況を説明すると、翌日のフライトでは、私は何もしないでいいから副操縦席に座っていればよいと言われました。通常のフライトでは機長が操縦して、副操縦士の私が管制官との通信や飛行計画の書類などの記入をします。口を開けにくかったのですが書類の記入や機長のオーダーによる飛行装置の操作には少しの問題もなく、カルカッタ経由でバンコクまで予定通り飛行する事ができました。

■教官の一言

私が機長訓練をうけている時のことです。私を担当していた教官機長が私に機長推薦のサインを下さるとき“お前は、操縦は下手だけど自分で下手を知っているから私は OK のサインをする”と言われました。その言葉にちょっと気になりましたがサインを貰えばこっちのものと思って深く考えませんでした。しかし機長になってから考えるとこの評価はとて有り難く、私にとって誇らしく思えてきました。飛行機の安全は教官の評価では無く、自分の技量の限界をしっかりと知ることで確保できると思うからです。操縦が上手な人を羨ましく思いましたが、下手でも定年まで事故を起こしませんでした。

■乗務を続けるには

私は一般のひとがあまり知る機会のないパイロットの訓練の様子や機長になる過程をお話してきました。私にとっては機長になることは自分の最も大きな目標であり挑戦でした。しかし機長になってからは機長資格の資格維持を、防衛戦のように感じてきました。半年毎のシミュレーターによる緊急操作や、故障時操作の審査をパスしなければいけません。これにもし失敗すると直ちに機長として乗務は出来なくなります。そのほか半年ごとの航空身体検査にも適合しなくてはなりません。検査の内容は視力、聴力は勿論ですが、血圧や血糖値、心電図のほか握力など多岐わたっています。また加齢していくと老眼鏡などが必要になりますが、使用している眼鏡のほかに予備の老眼鏡も携帯が義務づけられています。加齢していくに従い航空身体検査に適合できず乗務から離脱する仲間が増えてきます。

■事故についてお話しします。

事故について私はほとんど書いてきませんでした

が日本航空は本当に多くの事故を起こしてきました。ニューデリーの事故以来、会社は事故が起きる度に多くの施策をしてきました。しかし対策が不完全だったのか何度も事故を繰り返してしまいました。当事在籍していた私がこの場で話すのはあまり適当でないと承知していますが感じたことを書いてみます。日本航空はニューデリーの事故までは旅客の死亡事故は起こしていませんでした。1970年代にジャンボ機のB747が導入されてから、会社の規模が急速に大きくなり利益を上げる会社になりました。この時期に安全に対する緊張感が緩んだのかも知れません。事故が起きたとき会社全体で安全運航に対する意識に欠けていたのではないかと思います。事故を起こすのはパイロットが悪い、整備が悪いと感じて、会社全体で安全運航を自分達のこととして考えていなかったように思われました。運航本部や整備本部は合理化の指針の下に、経費の節約を進めていました。適正な経費節減は当然必要だと思いますが、安全運航に不可欠な乗員の教育訓練費や整備費及び整備訓練費まで削ってはいけません。一度事故を起こせば、お客様の命を奪い、会社は信用を失い、経費の合理化によって得た金額に比べ桁違いの損害を受けます。事故に遭遇した乗員は誰もが昨日まで私が話していた仲間です。逆に事故を起こさなければお客様の信頼を得て利用客も増え、航空機の事故保険料も軽減されると聞いています。

昨年機会があつて日本航空の羽田のオペレーションセンターに行き飛行管理室を見学しました。乗員は最初に飛行管理室に来るとフライトの資料に着手する前に、機長と副操縦士はお互いのライセンスを確認し、有効の航空身体検査証とアルコールの呼気検査に問題の無いことを静かに確認し、同時に現在体調にも問題の無いことをたしかめていました。ピリピリするほどの緊張感が私に伝わってきました。これまでに何人かの許しがたい規律違反を犯した乗務員のせいで、日本航空のパイロットは皆アルコール依存症の集団みたいに思われているかも知れませんが、私が見た現場は少しもそんなことはありませんでした。パイロット全員で信頼回復に一生懸命頑張っていました。何故かその様子を見て私までが緊張してしまいました。(続く)

前回の冒頭で述べたように、明清時代の著名十大商幫（「徽商」、「晋商」など）の中に河南籍の商人（企業家）を意味する「豫商」の名は見当たらない。しかし、当然のことながら、歴史上活躍した河南籍の企業家は多く存在する。その象徴と言えるのが、現在は国の重要文化財（国家重点文物保護単位）で4Aクラスの観光名所となっている「康百万莊園」の歴代当主、康家一族である。

孫学敏・周修亭（主編）『康百万莊園興盛四百年的奥秘』河南人民出版社、2007年、によると、康一族は明の時代に興り、清を経て中華民国の時代まで、12代、400年以上に亘って大富豪であった。「康百万」とは一族のうちの十余人の総称である。とりわけ清代中期に活躍した（初代から数えて）14代目の康応魁の時代が全盛期で、所有地の面積は18万畝（120平方キロメートル）、海運業を手広く営み、さらには、清朝による白蓮教鎮圧に乗じて「尽忠発財」（忠を尽くして金を儲ける）を実践して巨万の富を手にした。

その邸宅「康百万莊園」は河南省鞏義市にあり、17・18世紀の華北黄土高原封建堡壘式建築の典型とされている。約16万平方メートルという広大な敷地内に33の四合院をはじめ大小さまざまな建築物、庭園等が点在し、総建築面積は64,300平方メートルにおよぶ。とくに、それらの建築物には額（匾）、対聯（楹聯）が多数掲げられており、康一族の家訓・社訓を知ることができる。

中でも有名なのは表題を「留余」とする額であり、そこには儒教の重要思想の1つ「中庸」に基づき、物



「康百万莊園」（2015年11月 筆者撮影）

事を行うに際しては全てやり尽くすのではなく、常に一定の余地を残すべきである、といった内容が記されている。これは康一族にとっての経営哲学であり、400年以上に亘って栄えた秘訣である。

私が実際「康百万莊園」を訪れたのは2015年11月27日、やや季節外れの雪の降る日であった。残念ながら1時間ほどの見学であったが、小社会とも言える封建富豪の暮らしぶりの一端に触れることができた。代々康家の生活拠点である本宅（主宅）には「志欲光前唯是読書教子、心存裕後莫如勤儉持家」という楹聯が掛けられていた。鞏義市康百万莊園保護所編『河洛康家—中国第一莊園—楹聯集錦』2011年、によるとその大意は「もし、祖先の栄光を増し、面目を施すことを志すなら、読書に励み、よく子を教えるだけでよい。もし、子孫に幸福をもたらしたいと思うなら、勤勉で儉約して家事を取り仕切ればよい」である。

ところで、この「康百万莊園」の建築面積は代表的晋商（山西商人）の邸宅「喬家大院」の19倍もある。にもかかわらず、名所旧跡としての全国的知名度は「喬家大院」の方がはるかに上に行く。その理由は、張藝謀監督、鞏俐主演の映画『大紅灯籠高高挂』（1991年公開）の舞台となったこと、さらに、その後の2006年、連続テレビドラマ『喬家大院』（全45回）が人気を博したことがあげられている。このテレビドラマは私もDVDを買って見たが、主役の喬致庸を陳建斌が務めているほか、蔣勤勤、馬伊琍ら人気俳優が主要な役柄を占める、波乱万丈に満ちた一代記である。おそらく、陳建斌はこのドラマによって一躍、大俳優の仲間入りを果たしたのではないだろうか。

さて、ここからは前回紹介した現代の「豫商」あるいは「新豫商」の世界に戻ることにはしたい。現代の「豫商」は新たに起業を目指す人、あるいは起業してまもない経営者を支援し、「新豫商」を1人でも増やそうとする取り組みにも熱心である。起業支援は「大衆創業、万衆創新」（“大衆による起業、万人によるイノベーション”）という掛け声のもと中国政府が進める最重要政策の1つでもある。

この掛け声の中に見える言葉が公に使われたのは2014年第8回夏季ダボス会議の開幕式(2014年9月10日、天津)における李克強首相のあいさつであると言われている。このあいさつの中で李首相は前者について「960万平方公里土地上掀起一個“大衆創業”、“草根創業”的新浪潮(960平方キロメートルの土地の上に「大衆創業」、「草の根創業」という新しいうねりが盛り上がっている)と述べている。また、後者についても、中国の2億人近い各種の専門人材、技能労働者が自分たちの能力を發揮すれば、「万人創新」、「人人創新」という新形態を形成でき、それが中国の經濟發展を新しい段階に進め得るといった表現で触れている。

その後、この掛け声は2015年3月5日に開催された第十二期全国人民代表大会第三次會議における「2015年政府活動報告(政府工作報告)にも含まれ、同年6月16日には國務院により「關於大力推進大衆創業萬衆創新若干政策措施的意見(大衆による起業、万人によるイノベーションを強力に推進することに関する政策措置に対する若干の意見)が發布され、起業とイノベーションの大衆化を推進する政策が正式に始動した。

その内容は多岐に亘るが、十五項目に「創業孵化サービスの發展を加速させること」とあり、その中に「做大做強衆創空間(衆創空間を大きく力強くする)と書かれている。ここで、「衆創空間」とは英語のコワーキングスペース(coworking space)に対応するもので、共同で利用するオフィス空間を用意し、併せて入居者間の交流の場の提供、さらにはベンチャー投資機関への橋渡し役を担うなど、起業・創業を支援する組織である。

その後、中国では全国各地に「衆創空間」が設立されたが、ここでは、河南省における例を1つ紹介したい。河南省を代表する大学に鄭州大学がある。4つに分かれた総面積約3.8平方キロメートルという広大なキャンパスに約7万人が学ぶ総合大学であり、前身の国立第五中山大学を含めると90年以上の歴史を持つ。この鄭州大学の商学院經濟学系(商学院經濟学科)で経営学を専門とする孫學敏教授(鄭州大学企業研究センター長も兼任)が、學術研究と實際の起業支援を兼ねた「鄭州鄭大雲創科技有限公司」を設立

し、「鄭大雲創國際創新創業促進中心(別称、鄭州雲創「衆創空間)」を建設・運営している。

やや細かいことになるが、孫教授は「鄭州鄭大雲創科技有限公司」の創業者として総資本の63%を出資している。その他の出資者は3人と2法人であり、いずれも10%以下の出資比率である。2法人とはいずれも鄭州大学の名を冠した「鄭州大学サイエンスパーク(科技园)有限公司」と「鄭州大学資産經營有限責任公司」であり、後者は前者の株式を100%所有している。さらに後者の「鄭州大学資産經營有限責任公司」に対しては、鄭州大学本体が100%の株式を所有している。

中国では1980年代から大学が企業を設立する(校弁企業と呼ばれる)ことが盛んに行われた。この校弁企業は大学が直接經營していたが、次第にその弊害が現れてきたため、2000年代に入ってから大学傘下の企業の經營權を大学から分離する政策が国によって打ち出された。具体的には、大学が100%出資して大学の資産管理会社を設立し、大学傘下企業の經營權を移したのである。「鄭州大学資産經營有限責任公司」は鄭州大学における資産管理会社であり、現在、19社に出資し、その出資比率に応じて經營に関与している。

昨年末2019年12月27日に私は實際この「衆創空間」を訪問し、孫教授から話を伺った。この「衆創空間」は面積が5,000平方メートル、その時点で入居企業数は26社ということである。施設としては、最大700名を収容できる學術報告大ホール、交流カフェ、大小會議室、大小の個別オフィス、オープンスペースのオフィス等が完備されている。

さらに、ここには「ユヌス社会企業センター」(Yunus Social Business Centre)も併設されていた。バングラデシュの經濟学者で実業家のハマド・ユヌス(中国語では尤努斯)は貧困救済を目的に少額を無担保で融資するマイクロ・クレジットのグラミン銀行を創設し、また、利益の最大化を求めるのではない「ソーシャルビジネス」を提唱して、2006年にノーベル平和賞を受賞した。「ユヌス社会企業センター」とは彼の「ソーシャルビジネス」の考え方を広めるため世界各地の大学と提携して作られている組織であり、現在、全世界に82か所、存在する。中国でも、

雲南師範大学、中国人民大学等がこのセンターを持っているが、鄭州大学もそのうちの1校である。

入居企業の中でとくに興味深いのは「鄭州愛山荷文化伝媒有限公司」である。この会社は日本で10年間、留学・就業を経験して帰国した魏蘭君氏によって起業された。国の重要施策である農村振興に関わる事業として、農村文化の発掘と整理、インターネット＋農村の文化創造、農村における複数産業の融合発展、荷粉(蓮の粉)食品企業の支援、等を手掛けている。「インターネット＋」とは、やはり、国家レベルの政策であり、＋の後に、金融、医療、教育等、さまざまな言葉を付け、インターネットの利用をあらゆる分野で促進しようと意図している。

同社が現在、とくに重点的に取り組んでいるのは河南省焦作市修武県七賢鎮における全域観光IP産業化モデル事業である。ここで、IPとは英語のIntellectual Property(所有権)の略で、観光資源といった意味である。この鎮の名称は魏から晋にかけての3世紀ごろ阮籍、嵇康、山濤、向秀、劉伶、阮咸、王戎のいわゆる「竹林の七賢」がこの地に隠居していたことに因んでつけられている。同社によるこの農村振興モデルは七賢人それぞれの名前を割り当てた農園、観光施設、食品加工工場等で構成されている。

「鄭州雲創衆創空間」はその重要な活動として毎年春と秋の2回、論壇(フォーラム)を開催している。今年も去る6月20日「鄭州大学第六屆春華資本論壇」が施設内の大ホールで開かれた。今年は新型コロナウイルス流行の影響で、例年のように会場一杯の聴衆を入れることができなかつたため、会場における講演等の実施とインターネットを通じた全世界向け実況配信が併用された。実況を担当したのは香港系メディアの「鳳凰網」である。以下、私が視聴した内容について若干報告したい。

フォーラムのプログラムは、起業促進に係る各種新組織の認定式、講演、事業紹介などである。講演でまず登壇したのは、河南省豫商連合会会長の陳義初氏であった。講演は現在のコロナ禍のもとで、河南省として危機をチャンスに変えるにはどうしたらよいかをテーマとしていた。陳氏によると、河南省の製造業は部品を省外他地域に依存しているため、製品の売り上げのうち、河南省内に留まる価値が小さいと



「鄭州雲創衆創空間」オフィススペース

(2019年12月 筆者撮影)

いう問題がある。おりしもコロナ禍の影響でそうした分業による生産体制の見直しが進んでおり、河南省の中小企業を活性化させれば省内に留まる価値を増やすことが期待できる。

河南省發展和改革委員会数字經濟処調研員の郭延東氏の講演は、数字經濟(デジタル經濟)についてその概念から説き起こし、河南省における現状を詳しく伝えていた。郭氏によると、デジタル經濟とはデジタル化された知識・情報とインターネット技術を有効に利用することで經濟の量的・質的向上を図ろうとする一連の活動を指す。中国政府もその發展を目指してさまざまな取り組みを実施している中、河南省におけるデジタル經濟の規模は、その經濟規模に比較して、他の省に遅れをとっている。そのため河南省としては、今後、鄭州市を中核に18か所にデジタル經濟に関わる産業区を設置して、先端的な技術を持つ企業を誘致する計画である。

一連の講演の後は、個別企業による事業紹介があった。先に紹介した「愛山荷」による農村振興事業のほか、製造業、教育、農業、といったさまざまな業種の企業の代表者が登壇し、自社の事業の意義、可能性を説明して出資を募っていた。北京時間の朝9:00に始まったフォーラムは予定時間をかなり超過して、6:30に孫学敏教授による閉会の辞をもって終了した。地球規模での危機の下にあっても、こうした機会を通じて官・産・学が交流を深め、新しい起業社会を築こうという意気込みがパソコンの画面越しにも伝わってくる意義深い催しであった。

「義勇軍進行曲」を作曲した男・聂耳 寺西俊英

2020年7月17日(金)小雨降る中、わりい会員の和田宏さん、有為楠君代さんと三人で出掛けた。目的地は鵠沼海岸である。1935年のこの日に中国人では知らない人がいないと言える聂耳(ニエアル)という人物がこの海岸で遊泳中に亡くなったのである。「聂」という姓は珍しいが、学童の識字用テキストの「百家姓」には記載されている。この文字は簡体字であり、繁体字では「聶」と書く。つまり姓名合わせて4つの耳という字から成る。本稿は、わりい7月号の和田さんの「古き良き日中の民間友誼」の後半部分に聂耳が紹介されているので合わせてお読みいただければありがたい。

私が聂耳を知ったのは、7~8年前江の島に遊びに行き島の頂上に着いてあたりを散策していると、小さな記念碑があり彼の事績が刻まれた銅板を見た時である。「フーン! 中国の国歌を作曲した人が23歳の時、日本に来て鵠沼海岸で遊泳中に溺死したのか!」と軽い驚きを以て銅板の説明文を読んだ。この時は彼が日本に来た理由など知る由もない。その後は彼の名前に接する機会もなく時は流れたが、今年に入って和田さんから「毎年、聂耳の命日である7月17日に関係者が集まり偲ぶ会を開くそうだ。そこで義勇軍進行曲を作詞した田漢さんの姪がこの歌を歌う」という情報を頂いた。私は7~8年前の記憶がよみがえり参加したい旨を伝えた。姪の名前は「田偉」と言い、中国の武漢音楽学院を卒業後いくつもの功績を残した後1988年来日し、「田漢文化交流会」の理事長をはじめ多方面で活躍をされている方である。

偲ぶ会は9時から始まるということなので、小田急線の鵠沼海岸駅改札口で8時45分に集合した。海岸に向かって歩くとすぐ広い国道134号線にぶつかり、そこに架かった陸橋の上から見ると『聂耳記念広場』には、すでに10人くらい傘を差した人たちが集まっていた。陸橋からは遠くに江の島が見渡せる風光明媚なところである。早速参加者が集まっている場所に行くと和田さんが旧知の仲のように田偉さんと話し始めた。本人を以前から知っているのかと尋ねると、今回は初めてであるがすでにメールでやり取りしてお互いの顔も知っていたという。プロの

芸能人の田偉さんと社交的な和田さんは、やはり違うな!と感心しつつ話の中に入っていった。和田さんは持参してきた彼女の著書にサインを貰い写真も撮ってご満悦であった。そのうちに所縁のある人々が石碑の前に集まると、田偉さんが石碑をバックにして綺麗なソプラノで義勇軍進行曲(日本語の行進曲は中国語では進行曲という)を歌い始めた。“起来、不愿做奴隶的人们, 把我们的血肉, 筑成我的新的城长…”その歌声は小雨煙る鵠沼の海岸に響き渡った。

♪・♪・♪・♪・♪・♪・♪・♪・♪・♪

さて、このあたりで改めて「聂耳」の一生を見て行きたい。彼は1912年2月15日、雲南省の省都「昆明市」で生を受けた。母は傣(タイ)族の人。4歳の時、500の漢字が読めたという秀才であった。上海の歌劇団などで活躍、沢山の歌曲を作曲しており、彼自身も歌を歌ったりしている。そして1935年来日してすぐの7月17日に友人と鵠沼海岸に遊びに来て溺死した。23年余りのあまりにも短い一生であった。しかし彼が作曲した「義勇軍進行曲」が国歌になったことで永遠に中国人の記憶に残る人となった。この曲は、2008年の北京オリンピックで中国が金メダルを取るたびに51回も曲がかかったのが日本人にもなじみになったのではなかろうか。作詞は、田漢(1898~1968年)である。湖南省の省都である長沙の生まれで、中国新劇運動の中心的な人物だったそうだ。彼が19歳の年(1917年)に日本に留学し、東京高等師範学校(後の東京教育大学、筑波大学)に学んだ。ここで学ぶうちに演劇や映画に惹かれて行った。留学



左から3人目が田偉さん(2020年7月17日)

中に郭沫若（1892～1978年）と親交を結んだ。聂耳記念広場の一角には郭沫若が揮毫した文字の石碑が立っている。

聂耳の生きたわずか23年は中国にとって激動の時代であった。彼が生まれた前年には辛亥革命で清朝が倒れ、翌年の1912年の1月1日に孫文が臨時大總統となり中華民国が成立した。1921年には中国共産党の結成大会が上海であり、国民党の蒋介石と共産党の抗争が次第に激しくなっていくのである。世界を見ると1929年にはニューヨーク市にある『世界の金融センター』ウォール街での株価大暴落による世界恐慌が起こり全世界に余波が拡大して行った。そのような時、1930年7月に彼は昆明を出て上海に逃れて行った。これは昆明でも共産党員および関係者の逮捕が続き、情情的に共産主義に傾いていた彼は身の危険を感じて兄弟のつてを頼ってのことであった。彼はうまくタバコの間屋に就職できたが翌1931年には倒産し、また職を探すことになった。運よく「聯華歌舞団」の団員募集の広告を新聞で発見した。小さなころから音楽に興味を持ち楽器に親しんでいた彼は採用となった。この歌舞団は、以下のような錚々たるメンバーがいて彼は大いに鍛えられる日々を送った。「何日君再来」で国民的歌手となった周璇をはじめ、「夜来香」の作詞作曲した黎錦光と、その妹で歌手の黎莉莉、更にヴァイオリン演奏家の王人芸と女優の王人美兄妹、など多くの人材を輩出したのである。

充実した日々もつかの間、1931年には日本の関東軍による満州事変、翌年には満州国建国（中国では『偽満』という）と状況は更に複雑化した。こうした日本の関東軍の侵略に対し、東北地方では抗日運動が激化、上海も抗日救国運動が激しくなった。そして1933年には聂耳は中国共産党に入党。彼は、各地に義勇軍が起こりそれに参加して戦う若者たちの志を曲にしたのだ。この曲は、抗日プロパガンダ映画「風雲児女」の主題歌として作られたもので、この映画の初上映は1935年5月である。ただ彼は身の危険が徐々に迫り1935年4月に日本に渡った後であり、おそらくこの映画は見えていないのではないと思われる。彼は来日のあとも、曲を修正して中国に郵送している。そして日本に渡ってわずか3か月後前述したように溺死したのである。

一方作詞した田漢はどのような運命を辿ったか少

し触れなければならない。日本への留学から帰国した彼は、演劇に音楽に縦横無尽に活躍した。ところが1966年からの文化大革命（～1976年）で人生は一気に暗転するのである。彼の持つ歴史や文化に対する意識の原点が日本文化にある、と難癖を付けられ逮捕投獄されたのだ。自己批判を強要されたり拷問を受けたりした末に1968年獄中で帰らぬ人となった。文革はあたら有能な人材をゴミ屑のように扱った。

「義勇軍進行曲」は勇ましい国歌ではあるが、血の匂いがする国歌でもある。時代背景からすると仕方のないことであるが、私はもっと平和で穏やかな国歌を望みたい。これについて和田さんは、中国の国歌について次のように解説される。《新中国が欧米をはじめ日本などの列強に蚕食された上、続く国共内戦に勝って漸く独立を手にしたという血の滲むような経緯を考えると、この義勇軍進行曲の持つ歌詞や旋律はむしろ相応しい。フランスの国歌「ラ・マルセイエーズ」の“汚れた血が我らの畑の畝を満たすまで…”という歌詞も、アメリカ合衆国の国歌「星条旗」も“砲弾が赤く光りを放ち、宙で炸裂する中、我らの旗は夜通し翻っていた…”という歌詞などいずれも激しい歌詞である》と。確かにその通りではあるが、果たして国歌とはどのようなものが相応しいのか考えさせられる。

「義勇軍進行曲」が国歌に制定されたのは、田漢の名誉回復後の1982年のことである。

なお聂耳の本名は「聂守信」である。ペンネームの由来は、彼の聴覚（音感）が聯華歌舞団でずば抜けて素晴らしいことから仲間が「耳」とニックネームを付けたところからという。最後に彼の縁で昆明市と藤沢市は1981年に友好都市協定を結んだことを付言したい。



聂耳記念広場（遠くに見えるのは江の島）

【わんりいの催し】

ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体力を抜いて気持ちよく発声しよう！
声は健康のバロメーター！！

*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館・視聴覚室
- 日時：9月29日(火) 10:00～11:30
10月27日(火) 10:00～11:30
- 講師：Emme [エメ] (歌手)
- 会費：1,500円 (講師謝礼・会場費)
- 定員：15名 (原則として)
- 申込：☎042-735-7187 (鈴木)

~~~~~

### 中国語で読む 漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで  
漢詩の素晴らしさを味わおう！

録音機をお持ちの方はご持参ください。

- 会場：まちだ中央公民館・視聴覚室
- 日時：9月27日(日)  
10月25日(日)  
いずれも10:00～11:30
- 講師：植田渥雄先生  
桜美林大学名誉教授  
現桜美林大学孔子学院講師
- 会費：1,500円 (会場費・講師謝礼)
- 定員：20名 (原則として)
- 申込：☎090-1425-0472 (寺西)

Email:ukiuki65jpp@yahoo.co.jp

(有為楠)

#### ■ 9月定例会

▼ 9月8日(火)13:30～  
三輪センター第三会議室

#### ■ 'わんりい' 発送

▼ 10月号発送は9月30日(水)10:30～  
三輪センター第二・第三会議室

(弁当持参)

## ——編集後記——

重油にまみれ、かろうじてそれと分かるウミガメ、水鳥、カニやエビ。一瞬息をのみ、目には思わず涙がにじんできました。今までに何回も見た光景ですが、今回は日本の船が起こした事故と聞くと、心が痛みます。こんなに技術の進んだ世の中なのに、船から油の流出が予想されたときに、直ちに船の周りにオイルフェンスを巡らす技術はないのでしょうか。事故時の被害軽減技術の研究などには、企業はお金を出したがりないのでしょうか。温室効果ガスやプラスチック製品の使用削減、更には原子力発電にしても、代替品があるのに、企業はコスト高を理由になかなか取り入れようとしません。

最近の記録的高温は、そんなエコノミックアニマル・人類に対する地球の強烈なしっぺ返しではないでしょうか。もっと地球に負荷のかからない経済活動に転換しないと、人間は地球で生活できなくなるでしょう。

～・～・～・～・～・～

'わんりい' は、新入会をいつでも歓迎します  
年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい

9月以降の入会は、当年会費1100円。

■ 問合せ：044-986-4195 (寺西)

## 'わんりい' 256号の主な目次

|                        |    |
|------------------------|----|
| 寺子屋・四字成語(35)与虎謀皮       | 2  |
| 「日译诗词」(5) 辛棄疾の詞・二首     | 3  |
| 「漢詩の会」だより(40) 辛棄疾の詞を二首 | 4  |
| 中国の歴史を彩る美人百花(2)        | 7  |
| 四姑娘山写真だより④ 夏の花便り       | 10 |
| 海外出張の思い出(クウェート編④)      | 11 |
| 退職ジャンボ機長の回想⑨           | 13 |
| 「中原」雑感(5) 豫商から新豫商へ     | 15 |
| 「義勇軍進行曲」を作曲した男・聶耳      | 18 |
| 'わんりい'の催し・入会案内         | 20 |